

- 問一 子供達が体をきたえたり、学んだりしていた遊びの役割を、今は習い事が担うようになった。
- 問二 榎の木の枝を折った罰は気になるが、流産で空いた心の穴を埋めるかのように榎の木で作った味噌漉しを手放す気にはならない。
- 問三 自分の植えた唐松で家を建てると口ぐせのように言っていた祖母は亡くなり、唐松も倒れてしまったことに、一抹の寂しさを感じている。
- 問四 自分とおなじ年で死んでしまった榎の木をあわれに思い、自分の分身であるかのように大切に思っている。
- 問五 自分を冷静に見つめる視点や慎重さを持ち、大人びて落ち着いている兄に対して、幼さの残る弟はお調子者である反面、小心者であり、子供らしい感受性豊かな面を合わせ持っている。
- 問六 A 過多 B 成績 C 雑貨 D 営 E 局地
- 問一 自分の動作なのに、謙譲語ではなく、尊敬語を用いている。
- 問二 昔は「おとぎばなし」の中では「おうじさま」のような偉い人でも食べることができなかった「アイスクリーム」を、いま自分は食べているという満足感や喜びが、「ぼく」の心を大きくさせているから。

解 説

出典は南木佳士「ニジマスを釣る」(「熊出没注意 南木佳士自選短篇小説集」所収)。

問一「缶蹴り」(に限りませんが)という「遊び」の意義を考える必要があります。子どもは「遊び」を通じて、「仲間」との交流を深めたり、いざこざを調整したりといったさまざまな「人間関係」を学びます。その役割を今では「習い事」が取って代わっている。「缶蹴り」をやらなくなった子どもたちは、「スイミングスクール」や「少年サッカーチーム」などの「集団」に属することで、心身ともに成長していく。そして、そのために、今では「月謝」が必要となっているという「時代の変化」を理解しましょう。

問二 「それでいながら」は「澄子」が「お墓を移す」ことに非常に乗り気になっていることを指しています。「二年前の盆」に夫(私)の故郷を訪れた澄子は、「墓の上に枝を広げる榎の木」を見て、その枝を折って持ち帰り、「味噌漉し」を手作りしました。その墓のある一帯が「鉄砲水」に押し流されてしまったということを聞いた澄子は、動揺のあまり、味噌汁を「気管に入れ、激しくむせ」ます。「罰があったのかしら」ということばは、墓が流されたのは、自分が榎の木の枝を折ったことの報いなのではないかと澄子が考えたことを意味しています。罰当たりなことをしてしまって、ご先祖様を怒らせてしまったのではないかと焦った澄子は、墓を安全な場所に移して、きちんと供養するために夫(私)に帰省を促します。「罰」を恐れる澄子は、しかし「味噌漉し」を使い続けるという矛盾した行動をとります。枝を折って味噌漉しを作った澄子は、その三月前に流産していました。「なんだかたまらなく手作りのものを台所に置きたくなった」のは、子どもを産むことのできなかったことでざわついていた心を落ち着かせるという意味があったのでしょう。代わりに自分の手で何かを生み出したい。その思いを満たしたのが「味噌漉し作り」だったわけです。「罰」は怖い、だからといって、自分の作った「味噌漉し」を手放すという選択はありませんでした。

問三 鉄砲水に倒されてしまった「唐松」は、仕事が忙しくなって畑に通いきれなくなった(私の)祖母が植えたものです。その唐松も今や倒れ、「おまえさんが嫁でももらったら……」が口ぐせだった祖母も既に他界しています。唐松は育ち、「嫁」ももらった「私」でしたが、東京で家族四人が細々と暮らす

今の生活を考えると、家を建てることはできそうにありません。結局、祖母の思いは実現しないまま、唐松は倒れてしまった。時の流れはいろいろなものを過去へと押しやります。祖母の口癖を思い出しながら、「私」は寂しい笑みを浮かべます。

問四 ノコギリを入れた倒木が自分と「同い年」だと知った弟（健二）は、「おれとおなじ年で死んだのかよお、こいつ」と泣きそうになっています。見かねた兄（真一）から、「木のお墓を作ってやれば」いいのではないかとアドバイスされた健二は、さっそく作業に入ります。しかし、健二は「木を立てたまま両膝で抱え込み、左手でつかんでいとおしむよう」な変わった切り方をしている。しかも、自分の身長と同じ長さ。短い命を終えた木をあわれむ健二は、自分と同い年の木が邪険に扱われることに我慢がなりません。健二にとって「同い年の木」は、ただの「木」ではなく、自分の分身とでも言うべき存在となっていました。

問五 とつぜん木に登って枝を折り始めた母親を見た兄弟はそれぞれ違う反応を見せます。「やることが乱暴だな」と「大人びた笑み」を見せる兄にたいして、弟は「お墓でそういうことしていいのかよお、いいのかよお」と怯えながら母親の軽はずみな行動をとがめます。この対照的な反応を基準に、他の部分から兄弟の「違い」を探してみましょう。「おどけて腰をふらつかせながら作業」する弟と、「丁寧に枝を幹からそぎ落として」いく兄。「大人びた微笑」を浮かべる兄と「やったぜ」と無邪気に喜びを爆発させる幼い弟。冷静に年輪を数える兄と倒木に自らを重ねる、豊かな想像力や感受性を備えている弟…。「静」と「動」という大きな対比を軸に、詳細をまとめましょう。

□ 出典は佐藤義美「アイスクリームのうた」（『日本児童文学大系 第二七巻』所収）。

問一・二 とともに「めしあがる」という敬語の使い方について考える問題です。「ぼくは／おうじではないけれど／アイスクリームを／めしあがる」という歌詞は、そのまま読めば「ぼくがめしあがる」という誤った用法がなされていることに気づくはず。敬語を使うならば「いただく」という「謙譲語」を使うべきところで、「めしあがる」という尊敬語を自分自身に用いてしまったという誤った用法です（→問一）。ところが、この「誤用」が歌を愉快なものにしています。自分が食べている、おいしい「アイスクリーム」は、「おうじ」さまでも食べることができなかったほど、貴重な食べ物です。その喜び、満足感は、「ぼく」の心を大きくさせています。「おうじ様」ですら「めしあがる」ことのできない、おいしいアイスクリームを、いま「ぼく様」（？）がめしあがっている。うれしさと弾むような気持ちが、歌詞の全体から読み取れます（→問二）。